The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ので」の情報領域 ： 「から」の対話性と比較して
Author(s)	花井, 裕
Citation	阪大日本語研究. 1990, 2, p. 57-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9282
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「ので」の情報領域
——「から」の対話性と比較して——
Territory of Information in「node」sentence

花井　裕

キーワード：話し手の情報領域　共有情報領域　働きかけ　共有場面　対話機能

1．はじめに（問題のありか）
2．先行研究の整理
3．本論の立場
4．仮説—まとめ
5．資料および「ので」「から」の分布
6．「ので　から」の情報領域による分類
　6-1　現実現場的接近性
　6-2　心理的接近性（視点的接近性）
　6-3　三人称領域に属する情報
　6-4　客観的外部実態情報
　6-5　（s）（h）共有領域
7．情報領域のまとめ
8．個別の問題点再考
9．残された問題点＜のだから＞

1. はじめに

ノデとカラは，確定条件をあらわす代表的な接続助詞で，主として原因理由を表わすとされる。これについては

1）電車が遅れたから遅刻しました。

2）電車が遅れたので遅刻しました。

のように同一文型中入れ替えて用い得ることから，日本語教育の現場などではいろいろな議論がなされてきた。しかしこれに対しては，大わくとし

て，ノデが客観的な事態を根拠とした因果関係を表わし，カラが主観的な叙述関係の理由づけを主たる職能とする，ということが一般的に認められており，このことは否定されたことがない。

ただしこの論拠としての「カラは文末にモーダルな表現をとり，ノデはとらない」という立論に対しては，さまざまな例外の指摘や修正がなされてきた。

最初に日本語教育の場での問題のありかを確認したいと思う。（問題1.問題2.は豊田豊子氏（1987 NAFL）による。）

問題・1

3）最終診断が出たので球団とも相談の上出来るだけ早く態度を決めたい。（朝日1987.2.22）（意志）

4）一突然院長から「経営不振なのでやめてほしい」と言われた。（朝日1987.2.22）（通達）

5）車を洗うので降りてくれ。（原口裕　静女大研究紀要546）（命令）

これらの例は“ノデは「丁寧なやわらかい表現」であり，文末が丁寧な依頼表現などであれば照応する”（永野1988）とされてきた通説に反する。それは何故か。

問題・2

?6）今日は天気がよいので遊びに行きましょう。

?7）熱いお湯がわいているので飲みませんか。

6）7）は相手への待遇性が高い文，つまりノデ適格文のはずであるが，適正な文とは言えない。それは何故か。

問題・3

8）女中のすることが一々自分の意志に合わぬので不平でならない。（森鷗外　雁）

9）…昼はとほく澄みわたるので私のかへって行く故里がどこかにとほくあるようだ。（立原道造　萱草に寄す）

8）9）の例文は，全く他のかかわり得ない心象風景を描いたものであり，「主観を超えて存在する事実の因果関係」（永野1988）ではない。文末に

は“不平でならない”“ようだ”という主観的な話し手の気持ちが表出されているが，これを「から」文にすると，意味がとり難くなるのは何故か。

2. 先行研究の整理

「から」「ので」の研究については，文末助動詞との共起制約等を中心とした文構造，陳述面からのアプローチとして，永野賢氏（1952）が，「から」は話し手の主観（推量，見解，意志，決心，命令，依頼，勧誘，質問等）に基づく表現であり，「ので」は事実の因果関係を述べる表現であるとし，「ので」には拡張用法として待遇的な依頼表現がある，と説かれている。松村明氏（1969）森田良行氏（1980）なども大枠としてこれを受け継がれている。（補注１，２）

さらに奥田靖雄氏（1985，1986）は文末に現れる動詞のタイプを整理し他の条件法との違いについて述べられているが，相互の違いについては通説にしたがわれる。

これに対し，文体論的な特徴からの接近としては，永野賢氏（1988）が「ので」の待遇的用法を再説，更にそれぞれの使用分野を調査，「から」が会話文に多く現れ，「ので」が自叙伝，ト書き等に多いことを報告された。

第三に話し手と聞き手の認識の差からのアプローチとして，趙順文氏（1988）がある。趙氏は「ので」は事柄への聞き手の認識が低い時，「から」は既知であるか又は追体験しやすい時に用いるとされているが，その理由については待遇に求められていて必ずしも明らかでない。

3. 本論の立場

一般に確定条件を表わす文は，聞き手と話し手（S）の背景にある共有の知識を前提として成立する。

「Pので／からQ」文において，Pから導かれる無数の選択肢から，伝達の場面で要求されている命題がQとして選び出される。たとえば“風邪をひいた”というPに対し，“薬を飲む／デートの約束を断わる／論文が

間に合わない”等の選択肢の中から聞き手と共有するその文脈にもっとも適切なものがQとして選ばれる。この時Qが，話し手(S)のみで完結し得ないもの—働きかけの要素をもつ—であった場合，このPは話し手(S)と聞き手(H)の共有情報であることが要求される。

たとえばQが「遊びに行きましょう」であれば，Pは“お天気がいい”とか“休みが続く”“Aさんが招待してくれる”などが普通であり，“私の仕事が終わった”“私が国へ帰る”などの話し手内部情報は特殊な文脈がなければ適切でない。

したがってPがどんな情報源から出されたものであるかは，メッセージ理解の上で重要なポイントとなる。その時もしPの情報源が聞き手の知りえないものであった場合，Qにはどのような命題が選択され，また選択の際にどのような制約が現れるのであろうか。

本論では原因理由を表わす確定条件文Pので／からQにおいて，Pの情報領域(注)と接続のことばとのかかわりについて考え，それがどのようにQの選択を制約し，全体のメッセージにかかわっていくかを考える。

注　この稿における情報領域 /(S)/(H)/+(S，H)/−(S，H)/ への接近

1　現実的接近性

A　五感を通じて得られる直接体験。話し手によらなければ得ることが不可能な情報

B　伝達場面で話し手聞き手が現に共有している情報

2　心理的接近性（視点的接近性）

話し手の内的な抽象的認識能力による接近

A　(S)と(H)から等距離にある情報を(S)が(S)よりの情報として認識，伝達するもの

B　上の情報を(S)(H)共有の情報として伝達するもの

その他　(S)の個人情報，(S)の誕生日，居住地，親族等の情報などは本稿では，2．に含めた。

3　三人称人物の視点による接近

4　客観的接近性

事柄を第三者による検証可能な外部実態としてとらえたもので，視点性は表われない。

5　(S)(H)共有領域の生成（根拠と主張）

4.　仮説―まとめ

まず仮説を先に述べる。

1.　「ので」は基本的に或情報を話し手領域のものとして相手に送りとどける標識である。
2.　情報を，ア）話し手領域，イ）話し手聞き手共有外部領域，ウ）いずれにも属さない客観的実態の領域，にわけた場合，「ので」はア）およびウ）の領域にかかわる。
3.　「ので」文の前件と後件は，主として同じ領域のものを基本とする。
4.　「ので」文の後件には後に変更が起こるような要素――即ち問いかけ，誘いかけ，同意もとめなどの要素は来にくい。
5.　「から」は，聞き手と共有する情報領域に，新情報を持ち込むことを主な職能とする。この場合トピックの情報源としてはア）イ）ウ）いずれもあり得るが，ア）話し手領域のものの場合は場面（待遇）的に制約が生じる。
6.　ＰＱともまったく話し手心理領域の場合は「から」が，まったくの共有領域（現場など）の場合は「ので」が，それぞれ用い得ない。

5.　資料および「から」「ので」の分布

「から」と「ので」はそれぞれどのような分野で用いられているのであろうか。元来カラとノデはその出現にはかなりの差があることが報告されている。即ち松村明氏（1988）はカラ300余りに対しノデ100（資料夏目漱石こころ）と報告，伊藤勲氏（1986）はカラ598に対しノデ116（資料文学作品4編）と報告されている。

今回，資料は，話し手の内部的領域の表出を行なうものとして新聞の随筆欄から50編，あるテーマの下に共有の場を求めて働きかけ合うものとして対談23編を選んだ。(注1)

調査結果は次の通りである。

「ので」「から」の出現率

	total	随　筆	対　　話		
			ユリイカ	文　学　界	向田対談
「ので」	100%(79)	56%(57)	7%(4)	12.5%(3)	7%(15)
「から」	100%(310) (137)	44%(45) (0)	93%(54) (29)	87.5%(21) (4)	92%(190) (104)

予想通り，使用分野には大きなかたよりがあり，対話，会話文では約90%が「から」を用い，これに対して随筆，身辺雑記などでは「ので」が「から」を上回った。この結果は先学の調査でも同様の数値を示している。(注2)

即ち「から」の本質的なはたらきは会話の中で発揮され，「ので」のはたらきは戯曲のト書き（永野1988）や商品の説明書（趙1988）など一方的な伝達文の中に見出だされた。

このような分布の差が何を意味するかについては従来「から」のモダリティとの結びつき，及び「ので」の客観性にあると説明されてきた。

（注1）　随筆…文体差を考慮し，複数の書き手による短編を選んだ。
日経夕刊　1988　9月～11月　50編（原ひろ子　北村太郎　竹内宏　阿部牧郎　加藤幸子　佐江衆一　小山内美江子　秋田とき子）
対話…ユリイカ1988　8月号（未来都市のアルシーヴ　伊藤俊治／川本三郎　スーパーネイチャーと向きあうスピード　中沢新一／石井聡互）
文学界1988　3月号（快著会読　川本三郎／奥本大三郎／池内紀）
向田邦子全対談　文春文庫　（対談者18人）　山口瞳　小野田勇　水上強　江国滋　小田島雄誌　谷川俊太郎　山藤章二　吉行淳之介　二子山勝治　竹脇無我　中川一政　澤地久枝　倉本聡　下信一　阿川弘之　和田誠　矢口純　矢崎泰久

（注2）　伊藤勲氏（1986）が調査された4編の文学作品（三浦朱門「箱庭」柴田　翔「されどわれらが日々」　森村　桂「天国にいちばん近い島」　永井路子「朱なる十字架」）について，地の文「から」72%「ので」28%に対し会話文では「から」96.5%「ので」3.5%と大差のあることを述べられている。

永野氏（1988）は，社説，半自叙伝（菊池寛），　録音機（言語生

活），戯曲などを調査，同様の結果を報告された。

即ち「ので」の最も多いのは戯曲のト書きであり（92.7%）ついで自叙伝，婦人雑誌（30%），会話には7～8%しか見られない。「から」はこの逆で，会話および社説が90%をうわまわっているとされた。

6.　「ので」と「から」の情報領域による分類

では，実際に，「ので」「から」がそれぞれどの領域で使用されるかを見たい。用例は私の調査，早稲田日本語教科書上級，及び先学の論文中の用例である。

6—1　現実現場的接近性

6—1—A　直接体験的接近性

Pが話し手の体験に基づく情報であり，Qが同じく話し手の体験状況，行為など。

10）踊り子と間近に向かいあったので私はあわてて袂から煙草を取り出した。（出典1）　（出典記号については補注4参照）

11）当時私達は同人雑誌をやっていて，家も近かったので，始終会っていた。（出典2）

12）私の現在いる家は……父が住まっていた家の隣地にあたるので私は数え年6歳から20歳前後までをこの土地ですごした。（出典3）

13）他人の自転車なので，かなりじゃけんに突きとばしつつ歩いて行くと…（出典4）

今回の調査では「ので」文の58%がこれに属していた。破線は「ので」スコープの終了地点である。ここにあるのはすべて話し手の五感を通じて体験的に得られた情報である。

「から」文においては，前記「ので」文が体験的な状況，判断を述べるのに対し，将来も生起し得る習慣や法則として扱われていることが多い。しかしこの「から」は全体の7.1%でしかなく，話し手の体験的な情報の述べ立ては「から」の職能ではないことがわかる。

14）吸いたくなると書斎にこもるから，おのずと仕事をすることになり

原稿がはかどる。（出典５）

15）最近は徹夜をすると回復力がないから，その日のうちにベッドへ入る習慣をつけている。（出典６）

6—1—B　現場共有情報

6）今日はお天気がよいからあそびに行きましょう。

7）熱いお湯がわいているから飲みませんか。

16）あ！　まだ屋根が直っていないから，雨が漏ってきますね！。

これらは話し手聞き手共に現場で体験しつつあるもので，話し手の個人情報とはなり得ないものである。この場合は普通「から」によって接続され，「ので」は不自然である。これについて今少し述べてみよう。

17）牛乳配達のビンの音がする（　　）そろそろ６時だろう。

18）もう12時をすぎた（　　）寝ましょう。

19）あぶない（　　）あっちへ行ってなさい。

以上は永野氏（1988）がノデ・カラを選択肢として行ったアンケートで，カラの回答者がもっとも多かった３例（(19)は89.6%）である。

これらの例に客観的とか主観的とか言う分類はそぐわない。Pの現場の状況を背景として話し手の主張を述べたものである。“牛乳配達のビンの音”は話し手聞き手ともに聞いているものであって，話し手のみの主観的情報ではない。“あぶない”のは聞き手も同時に認識していることがらである。このことによって話し手の主張は補強され，正当性が生まれ，説得が達成される。

即ちQが聞き手への働きかけであるときは，Pは話し手聞き手共有の情報領域から出されたものであることが要求される。

牛乳配達のビンの音がするのでそろそろ６時だろう

では，話し手のひとり言と理解される。

6—2　心理的接近性（視点的接近性）

話し手内部の心理的アプローチによる情報Pは話し手の周辺事態に対する認識であり，Qは話し手の体験的行為，認識，評価である。6—1，6—2はいずれも話し手の内部領域の表出であり，大局的には同じグループに属

するものである。「ので」文の75%がこれに属していて，「ので」の本来的な機能が6—1，6—2にあることを思わせる。

20）わが息子もそのような年頃なので嘆いたり怒ったりしないように日頃から心掛けるようにしている。（出典７）

21）（私の犬は）冬の準備で新しい毛がでてくるので，すいてやらないと古い毛がいつまでも残ってしまう。（出典８）

22）こいつは私の気持ちがわかるので，その通りにやってくれるのです。（出典９）

23）実は祖母上さまからのお文がなかったので，もしやご病気ではないかとお案じ申し上げていたのです。（出典10）

この類には主文の文末に話し手の判断認識を表わすことばが現れることが多い。即ちわかる，判断する，と思う，困る，恐ろしい，安心する，のです，などである。

24）駅から遠くて不便なので，夜遅くなったときなどとても困る。（出典11）

25）はじめ飛行機にのったが，案外ゆれない（　　）安心した。（出典12）

26）そのことは伺っておりません（　　）私にはわかりかねます。（出典13）

25）26）は永野氏（1988）のアンケートで「ので」の回答がもっとも多かった（84.8%，82.6%）と報告されたものである。つまりノデ節Pが話し手の体験的情報であり，しかも主文末に話し手の認識を表わすことばがくる場合は，ほとんどの日本人が「ので」を選択する。

ただしPが話し手の体験的情報である場合及び実際に生起した実態である場合は，文末の，わかる，と思う，のだ，うれしい，困る，など話し手をあらわす標識は任意であるが，Pに非S情報があらわれた場合は義務的となる。

6—3　三人称領域に属する情報

Pの情報が非S領域に見えても，「ので」文では，一般にQ(S)の領域

に吸収される。

27）あんなに元気だった正弘君が車から降りたとたんに急におとなしくなってしまったので，僕はオヤッと思った。（出典14）

このときＰＱとも非Ｓ情報の場合，普通文末には，次のように話し手の認識を示す標識がつけられる。

28）中国では遊ぶ施設がないので出張者は夕食の時にはどうしても一杯やりたくなるのだろう。（出典５）

29）もともと花が好きであるし，画材にもなるので植物を育てているのだろう。（出典16）

（「のだ」の後の推量形は「ので」スコープの外である。）

28)29)を「から」文にすると，文末の「のだ」がなくても適格文である。

30）中国では遊ぶ施設がないから，出張者は…どうしても一杯やりたくなる。

6—4　客観的接近性

話し手聞き手いずれにも属さない情報領域

6—4—A　ＰＱとも既に生起した事柄，検証可能な実態であって，未来や不確定な事柄（はたらきかけ）は含まない。

31）ドイツの実例ではこの最低水準が炭坑夫に保証されなかったので出来高が下落した。（出典17）

32）六甲の山々が海にそって東西にのびているので神戸の町も細長くなっている。（出典18）

33）金沢市は加賀百万石の城下町として栄えたので，今も古い武家や商家の建物が残っている。

これらは当然未来や不定の事柄は含まないので次の33）は非文となる。

＊33）金沢市は加賀百万石の城下町として栄えただろうので，今も古い武家や商家の建物が残っているだろう。

この様にＰＱともある確定的な実態を表わす文は，これまで「ので」のもっとも本質的な職能とされて来たもので，「ので」文の文末に主観的表現が来にくいと主張されてきた根拠となっているものである。

ところで，話し手領域の情報をその成り立ちの条件とする「ので」は，その性格として，論理関係がＰＱ自体で完結する，いわば閉ざされた形を持っていて，話し手を離れた客観的な外部事態を表わす時は，特に変更不可能な事態に限られるのだと思われる。

しかしノデ文全体の中で，実際にこのグループが占める比率は，今回の調査によればわずか９％であり，次に示す恒常的ルールをあわせても，一割強にしかすぎない。これに対しカラ文では，物事の実態を表わす表現はほとんどなく，大部分が６－４－Ｂの形となっている。

6—4—B　恒常的ルール　不変の法則

34）水分が１グラム蒸発するために，少なくとも539カロリーの熱を自分自身が燃えて出した熱量でまかなうので鍋に行く熱がそれだけ減じる。（出典20）

この場合も，ノデ文が話し手にとって確実な実態でない外部条件にもとづいて帰結を述べるときは，その命題全体が話し手の情報領域であることを示す標識が付される場合が多い。

35）重油や石油はもやすと，二酸化炭素を発生しますが，同時に二酸化硫黄も発生するので，これらの物質は硫黄もふくんでいるのです。（出典19）

35）は原因と結果が逆になった例である。カラ文は次の通りである。

36）印鑑は誰が押しても有効だから，落としたり盗まれたりした場合は危険だ。（出典21）

37）需要過剰の状態のもとでは価格が上昇するから，それによって需要は抑制され，反面供給力は増大する。（出典22）

6—5　話し手聞き手共有情報とはたらきかけ

先に6-4-ＡでＰＱとも変更不可能な実態を表わす文を見たが，「から」文の場合はＱに不確定な要素があっても非文にはならない。

33）金沢市は加賀百万石の城下町として栄えた（だろう）から，今も古い武家や商家の建物が残っているだろう。

これは前件Ｐが同じく客観的領域であるが，Ｑが話し手聞き手の共有領

域となっているものである。先に6-1-Bで見た現場情報はこの中に含まれる。すなわち後件Qが話し手の依頼，勧誘，質問，同意求めなど，何等かのはたらきかけが行われているものである。「から」が主観的表現を職能とする，とされてきたのは，この類のモーダルな文末形式の故である。

「から」文全体のほぼ30%がこのグループである。例をあげる。

38）連休を利用して遠来の客もあるから，飛び石連休の時にはもっと柔軟に通し休日にすればいいのに。（出典21）

39）今日が誕生日だから（多分）二，三日前に到着しているだろう。（出典24）

40）面白いからやってごらん！

41）おばあちゃんにも話してあるから，むこうでおやつをもらいなさい。（出典25）

42）じゃ，今は赤の他人（註離婚したので）だから，僕も行こうかな。（出典26）

これらの文末の形—終助詞や省略や待遇等—は具体的な相手への働きかけの力を持っている。38)39)42）は同意求め，40）は誘いかけ，41）は具体的命令である。これらを「ので」文にすると大半は不適格な文となる。

＊38）連休を利用して遠来の客もあるので——略——通し休日にすればいいのに。

？40）面白いのでやってごらん！

？42）じゃ，今は赤の他人なので，ぼくも行こうかな。

「から」文で，Qに対するPの根拠づけという関係に働く聞き手の理解が，ここでは働いていない。

次にこの「から」文の変形として，分裂文“～は～からだ”を挙げる。

6—6　「から」分裂文

これは，6—5の変形と考えられるもので，話して聞き手が共有している場面Qに対し，新しい情報「Pからだ」を呈示するものであり，今回全「から」文の44%をしめていた。これと先の6—5をあわせると，74%となる。

43）（こどもの足をふく状況）あんよがきたないから。（出典27）

44）乳幼児の死亡率が減って人間が長命になったのは，瀬戸ものの食器で食事をするようになったからなんですって。（出典28）

45）対馬には江戸時代百姓一きがなかったのは，幕府公認の朝鮮貿易に加えて九州に飛地を与えられていたからでもあろう。（出典29）

この分裂文が対話文になると，現在の共有情報Qに対して，PはQの理由説明であるとともに，時には聞き手の行為をうながしたり阻止したりする機能を持つことがある。

46）A・どうしても行くんですか。

B・ええ，もう決めましたから。

47）A・お助けに行きましょうか。

B・いいえ，もう準備はできましたから。

48）A・まあ，大丈夫？（赤ちゃんが）

B・ええ，寝かせて来ましたから。

（以上出典30）

省略された部分“行くんです”46）“助けに来なくていい”47）“大丈夫”48）は既に状況の中で理解されていたものである。共有されているQ領域は，含意される求めによって変更の可能性も含んでいる。

「あなたが行かないから，私も行かない」は，現場状況Qによって，“あなたが行くと言えば私も行く”と変更の可能性がある。

「あなたが行かないので，私も行かない」では，“私が行かない”ことは決定ずみで，PはQを修飾する説明となっている。

ところで“「ので」です”の分裂文は存在しないが，会話文では文末に「ので」がくることがある。

49）「間違わずに来られましたか」

「ええ，ルグロさんが建物の前迄連れて来てくれたので」（出典31）

50）「もうお帰りですか」

「ええ，主人が帰って参りますので」（作例）

これらの「ので」が含意するものは過去の行為の説明，決意の理由であ

って，カラ文とは異なり，聞き手は話し手側論理を選択の余地なく受け入れざるを得ない。

7. 情報領域のまとめ

6．項の分類を，今回筆者の調査に限って分類したのが次の表1である。

Pから／のでQ文の情報（から…310例　　ので…79例）

前件P　＋　後件Q		「から」	「ので」
6.1 Sの体験的状況	Sの状況，行為	22(7.1 %)	46(58.2%)
6.2 Sの周辺状況認識	Sの認識許価行為	15(4.4 %)	13(16.5%)
6.3 非S個人情報	非S個人情報	9(2.9 %)	8(10%)文末ノダ
6.4 客観的外部実態	客観的外部実態	2(0.65%)	7(9%)
〃 恒常的ルール		10(3.2 %)	2(2.5%)
6.5 客観的外部共有情報（H)への働きかけ		91(29.4 %)	3(4%)文未ノダ
6.6 分裂文（QはPからだ）		137(44.2 %)	0
◆ 根拠・条件の文	相手への依頼通達形式	24(7.7 %)	0

先項でのべたように6.1および6.2は話し手の情報領域のものを話し手の論理関係によって説明したもので，「ので」文の約75％をしめている。6.3の非S個人情報（10％）も話し手の視点が第三者に同定されていると考えれば，また文未の多くがノダでしめくくられていることなどを考慮すると，実質はこれも話し手領域のグループに属するものと思われ，「ので」の本質的機能は話し手情報の述べたてであると言えそうである。

非S情報例．英子は…ひどい雨なので，顔も直さなかったのだろう。

（山の音　奥田靖雄1986用例）

6.4では従来の「ので」の本質的な機能とされてきた，既に生起した客観的な論理（実態）を述べるものは，シェアにして僅か9％，恒常的ルールをあわせても11％程度にすぎない。

一方，「から」は，6.5のPが外部情報でQに実質的働きかけの言葉があるもの（29.4％）と，6.6の聞き手との共有空間に“Pから”という新情報を持ちこむ分裂文（44.2％）がもっとも多く，この二つで74％をしめた。また分裂文は対話にもっとも多く見られ，「から」の本質的機能は対話において発揮されるといえそうである。

8. 個別の問題点再考

8—1 待遇性と視点的アプローチ

これは視点的接近性によるノデ文とカラ文の違いである。

1）電車が遅れたので，遅刻しました。

2）電車が遅れたから，遅刻しました。

この二文において，豊田氏（1987）は「ので」の文では，〜の理由で遅刻した，と事実を述べているのに対し「から」の文では—略—理由を前面に押し出し，「私が遅刻したのは〜の理由で，私が悪いわけではない」というニュアンスさえ持つことになります」と述べられている。これは，2）が“遅れた”事実を「から」によって話し手と聞き手の共有する領域に取り込もうとしたために押しつけがましいニュアンスが生まれるからだと考えられる。

1）は従来「ので」が客観的事実を述べることを職能とするため丁寧度が増すとされていた（永野1952，1988）が，いいかえれば“電車が遅れて遅刻した”と言うマイナスの内容を話し手領域のものとして呈示するために丁寧度が増すのだと考えられる。

即ち標識「ので」と「から」は，前件Pを異なった状況として呈示する。

51）秘書課の仕事が忙しいから，手伝ってくださいませんか。

52）秘書課の仕事が忙しいので，手伝ってくださいませんか。

51）は秘書課が忙しいから他の課に応援を頼んでいると理触され，52）は秘書のダレソレが個人的に忙しいのだと普通理解されやすい。

もし51）を秘書が個人的な依頼の時に用いると，忙しいのは当然あなたも知っていること，というニュアンスから礼を失した表現と感じられる場合があるが，また52）を秘書課全員が忙しい時，他の課に応援を依頼すべく用いられると，現場的事実に主観性が加わって過剰情報となり，更に内部論理が元来保有している閉鎖性が加わるので相手の応答を拒否していると言うふうに感じられる。もう一例挙げる。

53）夏休みがおわるから，宿題を早くしなければ。

54）夏休みがおわるので，宿題を早くしなければ。

上記２例では53）は“夏休みが終わる”をこどもと共有している母親が，こどもに注意を与えることばで，54）は宿題をする当のこどもの内言と普通理解される。

繰り返して述べると，「ので」の待遇性とはQが話し手の依頼，いいわけ等で，Pが話し手聞き手にとってあきらかに客観的な事柄である時，それを話し手の内部情報として「ので」で呈示すると，丁寧度は高まる。また，同様の事態で，あきらかに話し手の事情を「から」で客観的な情報として呈示するときは丁寧度はさがる。

以上は「ので」を用いると丁寧に感じられるという従来の指摘を，その理由に踏みこんで説明したものであるが，「ので」の非対話性は，一方的通達の色彩を帯びやすいので，状況によって押しつけがましい表現となる場合もある。

8—2　文末モダリティと「ので」「から」

先に述べてきたことと，従来，共起制約から考えられてきたモダリティとはどのようにかかわるのであろうか。

「ので」が話し手内部の論理関係を示す時，その成立を妨げるような要素，即ち後に変更を求められるような不確定な要素である質問，勧誘，依頼などは現われにくい。これらは，言いかえると聞き手へ働きかける力が（＋）のものである。

一般に，語形から働きかけの力を推定することは難しい。一方的なリアクションを求めない命令や依頼は，宣言や願望に似ており，大きくは，話し手の述べ立て（表出）に属している。推量，判断，決意もこの類である。

したがってこれらのものを文末モダリティと呼ぶとすれば，当然この種のモダリティは「ので」文の文末にあらわれる。

語形との関係で言えば，例えば「だろう」形の持つ意味は，推量のほかに判断，願望などの働きかけ（－）の表出に用いられるほか，働きかけ（＋）の肯否質問，念押し，同意求めなどに用いられる。先に**問題のありか**にあげた例３）４）５）はともに丁寧文でなく，しかも文末にモダリテ

ィを持つ問題の文として例示されたものであるが，3）4）はともに働きかけの力を持たない願望，意思を現わす話し手の内的表出の文で「ので」文特性とは矛盾しない。即ち3）は記者に対するコメントであり，4）は“と言われた”引用文の中であるが直接性については疑問がある。

3）最終診断が出たので球団とも相談の上できるだけ早く態度を決めたい。

4）突然院長から「経営不振なのでやめてほしい」と言われた。

ところで5）車を洗うので降りてくれ。において，“車を洗う”は話し手情報，客観的共有情報，どちらのものとしても提示できるが，文末は働きかけ（＋）の命令形である。しかもこの場合ＰＱは話し手領域の情報である。更にＱの働きかけは，反論を許さない一方的通達である。車は話し手のものであって，乗っているのは文句の言えない弱者であると予想される。これを　車を洗うから降りてくれ　とすると，丁寧度が上がり友人レベルなら待遇的にも許容される表現となる。更に

＊6）今日は天気がよいので遊びに行きましょう。

＊7）熱いお湯がわいているので飲みませんか。

において，6）の天気は一般的共有領域であって話し手の個人領域情報にはなり得ないので，ノデ文には不適当である。7）の熱いお湯は現場共有情報であって，これもノデ文にはそぐわない。

更に趙氏（1988）が永野氏への反論としてノデ文末にモダリティが来る例として出された例文についていくつか検討してみたい。

55）私が行かなかったので腹をたてたのだろう。　例文（1）

56）僕が試験中なので，隣できがねしたのだろう，ラジオをかけなくなった。　例文（3）

57）この文はそのとおり読めばよいので，特別な調べものをするまでもないでしょう。　例文（5）

58）赤ちゃんの口内粘膜は大変デリケートなので，傷をつけないように手ぎわよく，みがくようにしましょう。　例文（14）

例文（1）は独言か問に対する答えなのかはっきりしないが，～ノデ～ノ

ダの形で，ノデのスコープ全体を話し手がまず確認し，その文を推量している。例(3)も同じであるが，こちらは明らかに話し手の内言である。例(5)は話し手の判断を述べた“のであって”の文で，確定条件文ではない。例(14)は不特定多数に対して注意をあたえたもので，ポスターのスローガンに類するものであって，具体的な聞き手を想定していない。以下の例26)27)も同じ類である。

59) スイッチが切れてからすぐスイッチボタンを押してもスイッチは入りませんので，押さないでください。　例文（26）

60) 本書は再発行致しませんので，紛失しないように大切に保有してください。　例文（27）

つまり，ノデ文に許容されないモダリティーとは，念押し，同意求めなど具体的な相手めあての問いかけやさそいかけの機能をもつものであって，一方的通達，不特定多数を対象としたものはこの制約には入らない。くりかえして言えば，具体的に聞き手が存在し，何等かのリアクションを求めるモダリティーはノダ文の主文末にはそぐわない。聞き手がいなくても成立する表出，判断などのモダリティーは自由に現われる。（補注3）

最後に文末詞「ね」について述べておきたい。文末詞「ね」は，話し手の内的世界にある情報と同一であることを示す義務的標識である，とされる。（神尾1989・日本文法小事典）

・A吉田君，退院したらしいね。
　Bそうらしいですね。
・Aこの書類，税務署通るでしょうか。
　Bこれじゃ，無理ですねえ。

つまり「ね」は話し手と聞き手の情報領域が共有されていることを確認するものであるから，話し手聞き手の共有領域での理由文を職能としている「から」文の文末とはなじむが，本来話し手内部領域の論理を示すことを職能とする「ので」とはなじまない。

59) A吉田君，退院するらしいね。
　　B予定が九月だからそろそろですね。

？B予定が九月なのでそろそろですね。

60）Aこの書類，税務署通るでしょうか。

B基本的説明ができていないから，これじゃ無理でしょうね。

？B基本的説明ができていないので，これじゃ無理でしょうね。

61）足が冷たいからお靴をはきましょうね。

？62）足が冷たいのでお靴をはきましょうね。

8—2—1　根拠・条件について

＜行為成立の根拠＞

ところで先に述べた6—1—B 現場情報の「から」文は原因理由でなく，これから行われるべき行為の条件とか根拠を現わすものであった。この類がノデ文に用いられると次のようになる。

63）4月1日に入学式を行いますので，本書状御持参の上，受付けにお渡しください。

64）明日は慰安旅行のため，休業させていただきますのでご了承ください。

60）本書は再発行いたしませんので，紛失しないように大切にしてください。

これらの前件Pの入学式を行うこと，休業すること，は現場情報ではないが，それぞれ受付けに行く，ご了承いただく，ことの理由ではなく，主文の通達文の根拠となっている。これらは「から」文も可能である。

6—1のカラ文と異なり，このまったくリアクションを期待しないという性格は，「ので」の特性から生まれたもので，交通機関や商店などの客へのおねがい，新商品の取扱い説明書，公的通達などの分野に集中して用いられる。（そのため今回筆者の調査資料にはまったく現われなかった。）これらはいずれも結果について関心をはらっていないことで一致している。

確認しておくと同じ根拠・条件を現わすものでも典型的なカラ文では，

65）雨が降りそうだから傘を持って行きなさい。

66）そのはしごは危ないから，気をつけて。

となり，この種のものに「ので」は使えない。

これらは外部の共有領域の事態にもとづいて，働きかけを行う「から」の主要な機能である。

9. 残された問題点＜のだから＞

先の話し手の心理的情報がカラ文Pに現われるとどうなるか。一般に前件Pに話し手の領域情報であることがあきらかな言語状況があり，視点を明示する標識（ヤル　モラウ　クレル　クル　ヨコスや心情形容詞など）がきた場合，Qには聞き手との共有空間を示すような文は現れ難い。例67）のP（条件節）は主文の推論の根拠となっているものであるが，Pはあきらかに話し手の内部情報であり，Qは聞き手の存在を必要とするモダリティーを持っている。この場合はカラ／ノデいずれも不適切となる。

＊67）先生が発音のことなどどちっともかまってくれない（から／ので）実になっていなかったのであろう／でしょう！

この場合内部領域と外部領域をつなぐ“のだから”“ものだから”を用いてPQが接続される。

すなわち“ちっともかまってくれない”という話し手領域情報Pを，一度確認を示す「のだ」で受け止め，二つの異なった領域を結ぶ「から」と結合させることによって，Qにおける推論判断の根拠とする。この種の文は文末を確認の「のだ」で締め括り，～ノダカラ～ノダとなるものが多い。

67）入学して一番参ったことは英語の発音で――略――私は英語は得意であったが，生来耳が悪い上に田舎の中学であるから，発音などはちっともかまってくれないのだから，その点では実になっていなかったのであろう。（出典33）

68）（庭に草花が生えるのは）特に選んで植物を育てた覚えはないのだから，いわば自然が都会の片隅にあるこの庭を美しく飾ったのである。（出典34）

ノダカラ文はさらに，推論の根拠のみでなく話し手が話し手論理の上に立って，積極的に聞き手に働きかけを行いたい場合にも用いられる。

69）もちろん，お玉は，親のひっこしは自分が勝手にさせるのだから，

いっさいだんなに迷惑をかけないようにしたい，と…。　（出典35）

70）おじさんとおばさんはここで一服しているからね。おまえは目が悪いんだから，よくおまいりをしておいで。　（出典36）

71）こうした効用があるのだから，もうしばらく意地悪ばあさんを続けようと思っている。　（出典37）

これらのPはいずれも話し手領域の情報であるが，これをQと接続する話し手の視点はノデ文と違って，聞き手と共有の領域にあると思われる。そのために聞き手への働きかけが可能になっている。

繰り返してことわっておくと本稿で述べた“働きかけ”とは，特定の語彙形態をさすものではなく，実際の場面で文脈の上に現われる力のことである。即ち69）71）のような例では当該場面において自分の判断，意志に対する聞き手の容認を求めるはたらきを持っているが，そのはたらきをさす。

大胆に言えば“のだから／ものだから”は話し手が内部領域を示すノデ文のPと，聞き手への働きかけを示すカラ文のQを強引に結びつけたいと考えたときに用いられる標識であって，「から」の主観的な働きは，～ノダカラ文において発揮されるのだと思われる。

補注1　意味機能に関する従来の研究

松村明（1944）

「から」…理由・原因を示す接続助詞

「ので」…ある事実の断定を受けて，下の事実が生じることを表わす。命令・推量受願望などの意味は後件に来ない。

永野賢（1952）

「から」…話し手の主観（推量・見解・意志・決心・命令・依頼・勧誘・質問）に基づく表現である。

「ので」…主観的な理由を表わす機能はなく，話者の主観を超えて存在する事実の因果関係，事態を述べる。拡張用法として丁寧な依頼には「ので」を用いる。

森田良行（1980）

「から」…条件―結果の関係はともに話し手の主観によって認知された関係である。未確定の事柄や話し手の主観的判断による叙述は「から」を用いなければならない。

「ので」…話し手の主観以前にすでに存在する因果関係で，その全体を一つの事態として客観的に把握し叙述する形式。

山田みどり（1984）

永野説（「から」表現者の主観的措定，「ので」主観を超えた描写）に対する疑問を提出。

伊藤勲（1986）

350例の用例によって，「から」「ので」がカバーする範囲は，地の文，会話文などでかなり違っており，出現比率も「ので」は「から」の20％であることを調査。意味機能としては，「から」には主観的表現が多いが，客観的表現もかなりあり，「ので」には客観的表現が圧倒的に多いが，主観的表現も少しある，としている。

趙順文（1988）

「から」…広範囲にわたって用いられるが，とくに相手もよく知っている追体験しやすい理由を述べるときに用いられる。

「ので」…「から」と同様広く客観描写にも，推量，意志，質問，命令にも用いられるが，特に相手の対象に対する原因理由の認識が低いと話し手が判断するときに用いられる。自分の行動に用いる場合は，自然のなりゆきとでもいうべき動作の場合である。

勧誘や質問などに「ので」が用いられると，相手の認識が低いとみなすことになって相手のプライドを傷つけてしまうから丁寧形が用いられるのである。

補注２　「ので」の出自

「から」と「ので」は，普通，ともに接続助詞と説明される。しかし，この二つの出自はかなり違ったものであって，松下大三郎（標準日本口語法1930）は，“風が吹くから涼しい。の「から」は「東京から」「今日から」と同じく出発格である。”と述べ，一方「ので」については，“準体助詞の「の」に「で」がついたものであって，これは「火事で家が焼ける」「病気で人が死ぬ」のような，原因を叙述するところの「で」と同じく方法格である”としている。

三上章も，“終止形接続の「から」は，話手が言い切る形をとるために（言いかえれば一文としての條件を備えるために）『話手の責任がつく』ことになる”のであって，これは接続助詞であるが，“「何々シタノデ」は連体形と中止形から成っていて，つまり「ノデ」の前件と後件とは間をファイナルで遮られないから連続して一連の事件になる”とし，「ノデ」と「ノニ」とは準詞「ノダ」の活用系列に編入する。としている。（現代語法序説 1972），森田良行（1980）は，“「ので」は「のだ」の中止形に由来するだけにはっきりとした断定を行う条件形式である。確実性をもった条件と言っていい”と述べている。

渡辺実（1978）は，どちらも接続詞と呼ぶが，元来接続詞の職能とは“継起

的並列成分に副助詞や係助詞が下接して，時間や論理の順序が介入して分化発展したもの”とし，“二つの事柄を，敢えて一つの文の中で結びつけ”るとき，独立性を明確にするため，終止形につこうとするが，「ので」が「静かだので」と終止形につき得ないのは独立性の稀薄さを示すものである，としている。

くり返して整理すると，出発格を出自とする「から」は，文即ち終止形を受けて，接続展叙機能の備わった接続助詞としての地位を確保し，従属節を形成する。これに対し「ので」の“の”は，準体助詞であって，話し手によって一文全体が一つのコンセプトとしてまとめあげられ，それに“で”がついて，本文の連用従属成分を形成するものと考えられる。即ち「台風で屋根がこわれた」→「台風が吹いたので屋根がこわれた」。「雨でぬれてしまった」→「雨に降られたのでぬれてしまった」と，元来一文として認識されていたものの前伴部分を話手の概念としてまとめ直し，その継起について解説するものである。つまり「から」のように二文をつないだものではなく，そこに概念の転回，展叙の職能を持たないから，論理関係は話し手の中で完結し，まとまった一つの命題として聞き手に届けられる。

補注3　永野氏が誤用とされた

49）非常口を作ったのでなにかの時このひもをひいてくれ。

も間違いなくPQは話し手領域の情報でありQは現在リアクションを求めていない通達である。これのPを外部領域情報として

＊50）非常口があるのでなにかの時このひもをひいてくれ。

とすると，Qの内部情報とあわないため非文となる。「から」文は適正文である。

51）非常口があるから，なにかの時このひもをひきなさい。

補注4

出典1　川端康成　伊豆の踊り子　（早稲田上級教科書―以下早稲田）
〃　2　日本経済新聞　1988.10.21　佐江衆一
〃　3　円地文子　摘み草　（早稲田）
〃　4　日経　1988.11.2　加藤幸子
〃　5　〃　〃　9.18　佐江衆一
〃　6　〃　〃　10.3　北村太郎
〃　7　〃　〃　10.15　小山内美江子
〃　8　〃　〃　11.5　〃
〃　9　〃　〃　10.12　加藤幸子
〃　10　永井路子　朱なる十字架　（伊藤用例）
〃　11　日本文法大辞典　松村明　（吉田用例）
〃　12　永野賢（1988）　再説からとのではどう違うか　アンケート例
〃　13　〃

〃　14　キング　S 24.7　（永野1952用例）
〃　15　日経　1988.11. 4　竹内宏
〃　16　〃　〃　11.11　北村太郎
〃　17　エコノミスト　S 24.12　（永野1952用例）
〃　18　日経　1988.10　佐江衆一
〃　19　矢野健太郎　数学の楽しさ　（早稲田）
〃　20　言語学研究会・構文論グループ　条件づけを表現するつきそいあわせ文用例　（教育国語87）
〃　21　団伊久磨　印鑑　（早稲田）
〃　22　都留重人　経済を見る目　（早稲田）
〃　23　日経　1988.10.22　小山内美江子
〃　24　〃　〃　9.17　〃
〃　25　三浦朱門　箱庭　（伊藤用例）
〃　26　〃　〃　〃
〃　27　柴田翔　されどわれらが日々
〃　28　向田邦子対談集
〃　29　文学界　1988.3　快著会談
〃　30　向田邦子対談集
〃　31　趙順文　用例53
〃　32　〃　〃　27
〃　33　菊地寛　半自叙伝　（永野用例）
〃　34　日経　1988.10. 3　小山内美江子
〃　35　森鷗外　雁
〃　36　徳田秋声　あらくれ
〃　37　日経　1988.10.15　小山内美江子

参考文献

伊藤　勲　1986　「から」及び「ので」の用法　東京日本語学校紀要 7
井上和子編　1989　『日本文法小事典』　大修館
岡田安代・水谷修　1988　日本語の談話進行機能の一特色　日本語国際シンポ
奥田　靖雄　1986　条件づけを表現するつきそい・あわせ文「教育国語87」
神尾　昭雄　1979　On the notion speaker's territory of information
金水　敏　1988　日本語における心的空間と名詞句の指示「談話・意味・語用論」
久野　暲　1972　『日本文法研究』　大修館
〃　1978　『談話の文法』　〃
言語学研究会　1985　条件づけを表現するつきそい・あわせ文㈡「教育国語82」
国立国語研究所　1951　『現代語の助詞助動詞』　秀英出版

佐久間　鼎　1967　『現代日本語の表現と語法』
坂原　　茂　1988　メンタル・スペース理論と名詞句解釈のアルゴリズム「談話・意味・語用論」
竹田　恵子　1985　助詞「の」をめぐって　「語学研究41」
田窪　行則　1987　統語構造と文脈情報　「日本語学５号」
〃　　1988　対話における知識管理について「談話・意味・語用論」
高山　善行　1987　従属節におけるムード形式の実態について　「日本語学12号」
趙　　順文　1988　「から」と「ので」　「日本語学７号」
豊田　豊子　1987　日本語教師養成通信講座　NAFL
寺村　秀夫　1973　『日本語の文法(下)』日本語教育指導参考書
永野　　賢　1952　「から」と「ので」とはどう違うか　「国語と国文学」29巻5
〃　　1988　再説「から」と「ので」とはどうちがうか　「日本語学７―12号」
仁田　義雄　1989　述べ立てのモダリティと人称現象　阪大日本語研究１
林　　大　1964　「ダとナノダ」『講座現代語６』　口語文法の問題点
林　謙太郎　1985　準体助詞「の」解釈　「語学研究41」
原口　　裕　1970　「ノデ」の定着　「静岡女子大学研究紀要」４
松村　　明　1969　『助詞助動詞詳説』
〃　　1986　条件表現のうつりかわり　『日本語の世界２』
三上　　章　1953　『現代語法序説』　くろしお出版
〃　　1963　『日本語の構文』　〃
南　不二男　1974　『現代日本語の構造』　大修館
森田　良行　1980　『基礎日本語』３　角川書店
山田みどり　1984　助詞の諸問題　『研究資料日本文法５』
渡辺　　実　1975　『国語構文論』　塙書房

（はない　ゆたか　文学部日本学科研究生）